

# 群、来

第79号 令和4年2月28日発行

編集・発行 秋田県水産振興センター  
〒010-0531  
秋田県男鹿市船川港台島字鵜ノ崎8-4  
TEL 0185-27-3003 FAX 0185-27-3004



おがれ（大きくなれ）ワカメたち！

男鹿市羽立

## 「一度は憧れる職業」のために



所長 阿部 喜孝

子どもの頃、遊びのフィールドは近くの山で、竹竿をかつぎバケツを握って山道を1時間以上も歩き、夢中になってため池に通ったものだ。時を経て、社会人となってからは、先輩の誘いを受け、生まれて初めてイワナを釣り、そして海では、クロダイという"魔物"に出会ってしまった。これは多分、自分の人生に大きな影響を及ぼすことになり、いまこうして鵜ノ崎に通っている。

毎年センターで開催される参観デーでは、眼を輝かせながら、無心に2時間も3時間もタッチプールやお魚風呂で魚を追いかける子どもたちがいる。また、テレビの前では、一攫千金を夢見て厳寒の荒れた海へ船を出すマグロ漁師の奮闘に、多くの視聴者が夢と希望を託す。「自らの力で魚を獲り、生計を立てるといふ漁師の仕事は、他の仕事にはない魅力を持っており、多くの人が一度は憧れる職業です」。あきた漁業スクールトライアル研修の開講式では、毎年このフレーズがあいさつ原稿に登場する。

しかし、かの番組では"悲運の漁師"の苦闘も映し出し、憧れやロマンだけでは生きていけない現実も突きつけられる。夢中で魚を追いかけていた子どもたちや、魚大好きな釣りキチなど、一度は漁師の仕事に憧れたであろう多くの人々の大概は、安定した"稼ぎ"のある職業へと針路を決めていく。

当センターではいま、水産物取引の活性化に資するICTを活用した漁業・流通支援システムを構築中であり、ハタハタ資源対策協議会には流通加工部門を創設、またブリやサーモン、ギバサ等の蓄養殖試験にも取り組むなど、"稼ぎ"を増やす研究にも着手している。一人でも多くの人が「一度は憧れる職業」への夢をかなえられるよう、担い手育成という新たな課題にも挑んでいく。

●研究成果報告 (資源部) ●

新たなハタハタの漁業管理

これまで、本県のハタハタ漁業は、漁獲可能量にもとづき設定された漁獲枠 (TAC) により管理されてきました。ところが、漁獲可能量は、ハタハタ日本海北部系群を利用する青森県～富山県全体の推定資源量をもとに計算する他、推定資源量が小さい今のような状況では、近年の海洋環境の変化に伴って生じると考えられる漁場の偏りへの対応が困難となっていました。また、漁業者配分枠があると低単価の小サイズ雄などは統計上の漁獲量に反映されにくいという課題もありました。

そこで、「量」管理を見直し、「日数」管理に移行するための試算として、令和3年漁期の獲り方 (漁獲努力量) を、過去3年平均 (平成30年漁期から令和2年漁期) の9割にできると、漁獲量も維持されると推定しました。具体的には、秋田県ハタハタ資源対策協議会において、以下のように、令和3年漁期の目標漁獲努力量を地区、漁法ごとに水揚日数×経営体数で設定しました。

漁法	漁獲努力量カウント方法	岩館	八森	能代	峰浜	浅内	八竜	若美	五里合	北浦	島	戸賀	船川	脇本	船越	天王	秋田	道川	松ヶ崎	西目	平沢	金浦	象潟
さし網	経営体ごとの水揚上限日数	12	12															15	15				
	経営体数	8	14															12	10				
定置網	経営体ごとの水揚上限日数	12	12	12				12	12	15			15	15		12		17			15	17	15
	経営体数	4	5	1				2	6	8			30	6		5		1			1	1	2
底びき網	経営体ごとの水揚上限日数	22	22																		22	22	22
	経営体数	3	4																		1	5	2

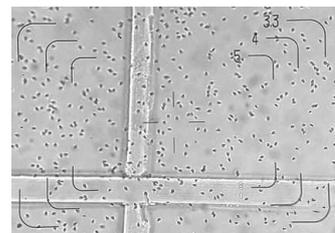
令和3年漁期の目標漁獲努力量

今後は、ハタハタ資源低水準期を乗り切るために、沖合では、千秋丸を含め、漁期中の漁場情報を共有し効率よく操業し、沿岸では、地区ごとにモニタリング網を導入するなど、漁労コストを節約すべきと考えます。さらに、新設された秋田県ハタハタ資源対策協議会 流通加工部会において、漁業者が収益を維持でき、かつ「県の魚ハタハタ」が県民の口に届くような適切な流通を含めて、ハタハタ漁業のあり方を総合的に検討できるよう努めてまいります。

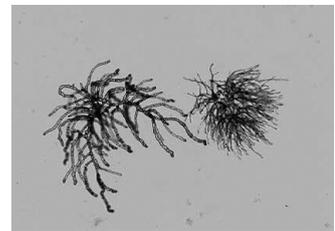
●研究成果報告 (増殖部) ●

ワカメ種系生産・養殖技術の改良

本県におけるワカメ養殖生産量は、近年、種苗の生育不良や気候変動などの影響により、年によって変動が激しい上、減少傾向にありました。そこで、当センターでは、先進県の事例を参考に、種系の生産工程や沖出し方法を見直し、生産技術の改良に取り組みました。ワカメの種系生産は、春にメカブから放出される種「遊走子」の採取から始まります。放出直後の遊走子は、鞭毛をもち活発に泳ぎ回りますが、適当な基質に着生すると、鞭毛を失って配偶体になります。遊走子の状態では雌雄の判別はできませんが、配偶体になった約1か月後に雌雄それぞれの特徴が現れます。これまでは雌雄混合で培養していましたが、顕微鏡とピンセットを用いて雌雄配偶体をひとつひとつ単離培養し、適正な雌雄比で糸上に配偶体を付着させることで、高密度に幼芽を発芽させることができました。さらに、幼芽は、高水温・高照度に弱いことから、例年より養殖開始水温を低くしたほか (20℃→18℃)、種系を滅菌海水で湿らせた



メカブから放出された遊走子



左:雌性配偶体 右:雄性配偶体



男鹿市戸賀 (令和3年2月)

新聞紙に包んで配布するなどの芽落ち対策を徹底しました。その結果、令和3年春の水揚量は、前年の約3.6倍に増加しました。今後は、海洋環境の変化に適応可能な養殖技術の開発を進めるほか、今年度新たに導入したICTブイを活用し、リアルタイムで水温情報等を把握できる観測体制の構築を図り、より安定的かつ効率的な養殖生産につなげていけるよう努めてまいります。

## ● 普及活動報告（総務企画班） ●

# 県水産物の流通や消費を応援！ 「秋田県水産情報サイト」を運用します

本県漁業の経営環境は、漁獲量の減少や魚価の低迷など、厳しい状況が続いています。一方で、ネット販売による個人向けの水産物の販売需要は拡大傾向にあるようです。消費者は今後ますます、漁業者の顔が見え、産地の確かな情報が付与されている水産物を選ぶ傾向が強まるでしょう。特に海況条件が厳しい本県では、貴重な出漁機会に得られた漁獲物で十分な収益を得るためにも、新鮮な水産物の情報をいち早く、より広く発信して消費者を掴み、本県水産物の付加価値向上や消費拡大に繋げる取組が必要です。

県では、漁船の操業情報で県産水産物の消費拡大を図るために、国の支援<sup>\*</sup>と漁業者の協力を得て漁船に様々なICT機器を搭載し、出漁状況や漁獲量などの情報収集システムづくりに取り組んでいます。この度、それらの情報を自動処理して市場関係者がスマートフォン等で閲覧できる「秋田県水産情報サイト」が完成しました。サイトに登録した人は、漁船の出漁状況をリアルタイムで知ることができるほか、水揚予定の魚種や量を入港の数時間前に知ることができます。令和4年度からは本サイトも利用して、県産水産物の流通、消費の一層の拡大を図る取組を進めていきます。

出漁状況

03/08 05:53 現在

岩館		
〇〇〇丸	出港	
〇〇〇丸	操業中	
〇〇〇丸	操業中	
八森		
〇〇〇丸	出港	
〇〇〇丸	操業中	
北浦		
〇〇〇丸	出港	
畠		
〇〇〇丸	出港	
船川橋		
〇〇〇丸	出港	

水揚げ予定

03/11 ○:○ 現在  
単位：kg

岩館	
スルメイカ	680
ババガレイ	10
ヒラメ	1
マガレイ	55
マコガレイ	5
マダラ	120
ヤナギムシガレイ	110
ヤリイカ	10
八森	
キアンコウ	10
ニギス	15
ババガレイ	11

※事業名「産地市場のICT化による短期大量漁獲魚ハタハタの漁船・漁業の効率化」、2019-2021年度 資源・漁獲情報ネットワーク構築委託事業（水産庁）

## ●トピックス（総務企画班）●

### 展示ホールで飼育していたオオクチバスについて

令和3年8月10日、当センターの展示水槽で18年間飼育していたオオクチバスが老衰により死亡しました。

オオクチバス (*Micropterus salmoides*) は北米原産の淡水魚で、近縁種のコクチバスなどとともに「ブラックバス」の通称で呼ばれ、釣りの対象魚として人気があります。

日本においては大正15年に神奈川県芦ノ湖に人為的に放流されて以降、放流やアユ等種苗への混入などにより生息域を全国各地に広げ、在来種の捕食や在来生態系への影響が問題となったことから、平成17年に施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」で様々な規制を伴う特定外来生物に指定されました。そのため、この個体も特別な許可を得て飼育していました。

本県においても昭和57年に秋田市内の空素沼で初確認され、その後も全県の水域で生息が確認されたことから、駆除活動や生態系への影響調査が継続して実施されています。

オオクチバスの寿命は一説には15～20年とも云われていますが、少なくとも国内で行われた調査では平均寿命は7～8年、長くても12～13年という結果が出ています。

今回死亡した個体は平成15年に生態調査のために八郎湖から採捕したもので、採捕時点で3～4歳と推測されていたので、死亡時点での推定年齢は21～22歳と、記録的な長寿個体であったかもしれません。



晩年の姿（平成31年3月5日撮影）

## 水産振興センター参観デーを開催しました

秋田の魚や漁業への親しみや理解を深めていただくため、令和3年8月7日（土）に「参観デー」を開催しました。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、例年とは異なり、全ての企画を屋外開催としたほか、受付時の検温やマスクの着用、手指の消毒など様々な感染対策を実施し、173名の方々にご来場いただきました。

触れ合いコーナーでは、毎年大人気の「タッチプール」で、多くの子供達が海の生き物に触れ、楽しそうな笑顔を見せていました。「栽培漁業施設見学」では、各設備や飼育中の魚をご覧いただきました。「貝殻工作」では、貝殻やビーズ、紐を使ってオリジナルのストラップを製作していただきました。また、クイズラリーや研究成果のパネル展示をとおして、秋田の水産業や私たちの仕事について理解を深めていただきました。さらに、今年度は、男鹿で水揚げされたシラの解体ショーを行い、「幽庵焼き」に調理後、皆様に試食をしていただきました。

来場者の皆様からいただいたアンケートでは、「子供達がお魚大好きなので色々な楽しみ方ができました」、「屋外での開催は開放感があって良かったです」といった嬉しい意見が多数寄せられました。来年度も皆様に喜んでいただける企画を用意して開催したいと考えています。



タッチプール



お魚解体ショー